

## 経管栄養後の離床に関する調査報告

経管栄養は嚥下障害を呈する患者さんを中心に、医療機関から在宅まで幅広く実施されていますが、その方法は実は医療者や施設によって異なるのが実情です。

今回、経管栄養後どのくらい時間をおいて離床（離床を伴うケア）を実施しているか、アンケート調査を実施したので報告します。

### 方法

2013年12月7日～15日に開催された日本離床研究会教育講座にてアンケートを実施

#### ●設問

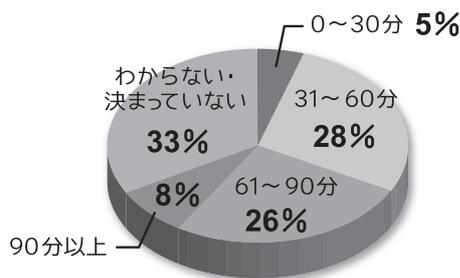
経管栄養後どのくらい時間を空けてから離床していますか？

#### ●回答選択肢

0～30分、31～60分、61～90分、90分以上、わからない・決まっていない、のいずれかにチェックをする

### 結果

- ・アンケート回収総数 767
- ・有効アンケート総数 734



### 考察

本調査の結果より約半数の施設（病棟）において、経管栄養投与後、30分～60分時間を空けて離床しているという結果でした。

一方で経管栄養後の安静時間が決まっていないというところも約3割と、バラつきがみられました。

文献的にも経管栄養中の体位や栄養剤投与速

度に関する記述は多く存在しますが、投与後の安静時間について書かれているものはほとんどみることがありません。このヒントは、ASPEN（米国静脈経腸栄養学会）のガイドライン<sup>1)</sup>にあります。

本ガイドラインでは、栄養が開始後胃内容物を頻りにチェックし、残量200ml以上が2回連続したら栄養を中止することを推奨しています。

これは離床にも応用出来ると考えられ、胃内残量が多い時（100ml以上）には離床を控えた方が良いと思われます。

通常水分は胃内に停滞せずすぐに小腸へ移行しますので、300mlが30分もすれば胃から移動しますが、牛乳など蛋白質・脂質が含まれると胃内停滞時間は1時間～2時間に延長します。

これらのことから考えると経管栄養後1時間程度の安静は妥当のように思われます。しかし、消化管の状態（しばらく絶食だった、消化管に炎症がある）や、便秘などがあると胃内停滞時間は延長しますので、個々もアセスメントが重要だと考えられました。

### 文献

- 1) The Standards of Training Committees of The American Society for Gastrointestinal Endoscopy. Principles of Training in Gastrointestinal Endoscopy. 1992.

著者情報：飯田 祥 \* 黒田 智也 \* 曷川 元 \*  
\* 日本離床研究会 学術研究部

### 段階的離床

